

国際協力特別賞

ボーダーのない社会

在ミャンマー日本国大使館附属ヤンゴン日本人学校 2年

野中 優那

ベトナムには暗闇のレストランがある。私の手を取り、席に案内してくれるのは全盲のベトナム人スタッフだ。彼らは流暢な英語や日本語を話し、カトラリーを私たちの手に握らせ、料理の皿に誘導する。彼らの温かい手と、優しい語りは、私を安心させた。真っ暗闇の中で、私は感覚を研ぎ澄ませ、自分が何を食べているのかを想像する。味や食感から色や形を想像したのは初めての経験だった。

この日、健常者である私は、暗闇の中で、一人では何もできなかった。もし私たちが暗闇の世界に生きていたなら、全盲であることは障害ではない。目が見える大多数派の社会の中で、彼らは障害者として生きているのだ。

私の兄は文字が書けない。学習障害（Learning disability）だ。読み書きを重要視する日本の中学校で、兄はなかなか理解されなかった。

私は兄と同じ年齢になり、当時の彼の苦悩が理解できる。毎日の板書、定期試験、そして高校受験。もし紙の解答用紙に手書きで答えを書くことができなかつたら。私はきっと絶望するに違いない。

いま、兄はパソコンで書いたエッセイをメールで提出する。協議の上、パソコンで試験を受ける。インターナショナルスクールには障害を補い学ぶ仕組みがある。書けないことで、教育の機会を失うことはない。兄は「むしろ最大の障害は英語力だね。」と笑う。

これらの経験を通して、私は社会的障壁の意味を知った。しかしボーダーは人の心にこそある。

「お前のお兄ちゃんは障害者だ。だからお前の家族はみんなダメなんだ。」と言われたことがある。その時、悔しさより、兄と同一視されたことに驚きを感じた。そして障害者に対するバリア（偏見）という見えない魔物がいるようで恐ろしかった。私がそれに対峙するには、辛抱強く対話していくしかない。

令和初の参議院選挙では、2人の重度障害者が当選し、議員になった。

彼らの演説で印象的だったのは「国民を守るための法律が、障害者にとっての障壁になる。」という言葉だ。二〇一六年四月から障害者差別解消法が施行され、公的機関において合理的配慮が義務化された。とはいえ、現行法では重度障害者が自立生活を送るのは難しいと聞く。彼らが国政に携わることで、障害者の社会参画が当たり前になる。そんな社会が一日も早く実現されることを願う。

健常者と障害者のボーダーがなくなること。そして誰もが暮らしやすい社会となること。それが私の望む未来だ。私は将来、精神科医となり、障害者とその家族の心の健康を支え、また、社会のバリアを壊したい。

健常、障害に関わらず、私たちは自立し、より良い未来を作るために学ぶ。生まれた瞬間から歩ける人間はいない。人は共助してこそ生きることができる。超高齢社会で生きていく私たちは、もう一度、共生の意味を考える必要がある。